北本城跡（きたほんじょうせき）Ⅲ

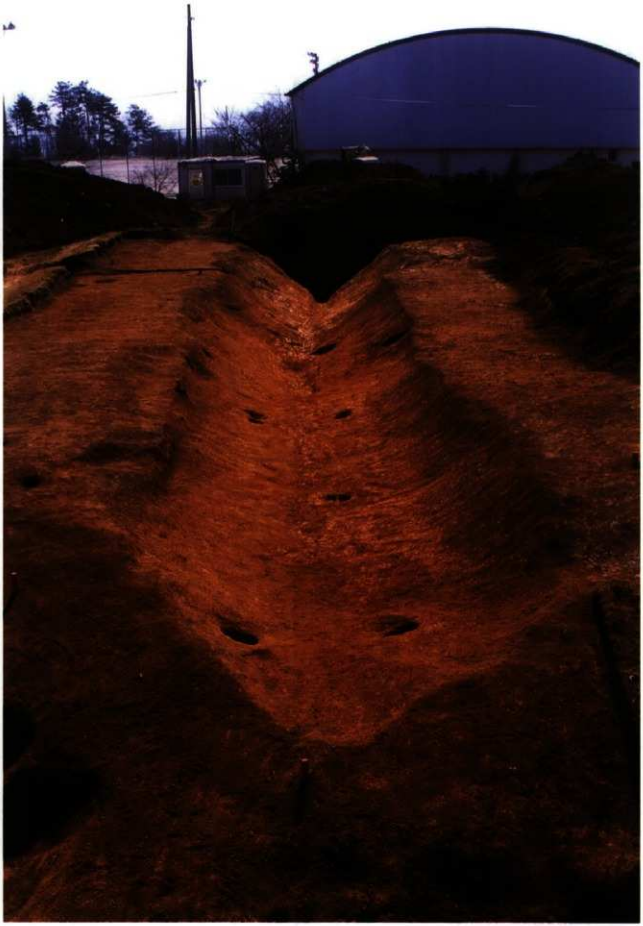
2005年3月

長野県飯田市教育委員会

北本城跡（きたほんじょうせき）Ⅲ

2005年3月

長野県飯田市教育委員会



SD16

SD16
出土遺物

SD17
出土遺物

SD17
出土遺物

序

北本城城跡が位置する座光寺地区は飯田市の北東部、天竜川河岸から木曽山脈前山の麓までの細長い範囲を占め、川沿いの平坦地から段丘面・扇状地等に比較的広い耕地が広がっています。また、当地区は古来より交通の要衝に位置しており、古代伊那郡衙である恒川遺跡群等の埋蔵文化財包蔵地が確認されています。このように古の時代より人々は生活し、多くの文化・伝統をこの地に残してきました。今に残るその伝統の一つが明治6年に建設された舞台校舎を持つ旧麻績学校校舎です。現在学校自体は座光寺小学校として移転新築されていますが、舞台校舎はそのまま県宝として保存されており、地区民に「舞台校舎」「麻績校舎」と呼ばれ、親しまれています。

座光寺地区は飯田市街地に近いことや農業後継者の不足等から年々宅地化が進んでいます。道路も国道153号・県道飯島飯田線バイパス等が建設されるなど交通の便が良くなり、日に日にその姿を変えております。それ故、地域社会や文化を形作ってきた様々な証である文化財をできる限り現状のままで後世に伝えることが私たちの責務でしょう。けれども、同時に私たちはよりよい社会や生活を求めていく権利を持っています。ですから、日常生活の中で、開発と文化財の保護という相容れない事態に直面することが多くなっています。そのため、事前に発掘調査を実施して記録保存を図ることもやむを得ないことといえましょう。

飯田市は既存の大堤保育園と座光寺保育園を統合して新たな保育園の建設を計画しました。地区の児童数の状況を考えると必要な事業といえましょう。しかし、今回の建設予定地は市内でも数少ない中世城郭である北本城跡の範囲内であり、これまで2回の発掘調査が実施されています。そこで、次善の策ではありますが、工事実施に先立って緊急発掘調査を行い、記録保存をはかりました。今回の調査では、西・北曲輪内の施設の状況、曲輪を画する堀の痕跡等を確認しましたが、これらの調査成果は地域の歴史を知る上で貴重な資料となることでしょう。

最後になりましたが、調査実施にあたり文化財保護の本旨に多大なご理解とご協力をいただいた関係各機関の皆様、座光寺地区の皆様をはじめ、本調査に関係された全ての皆様方に深く感謝を申し上げます。

平成17年3月

飯田市教育委員会
教育長　冨田榮啓

例　言

1．本書は、座光寺保育園建設に先立って実施された、北本城跡の緊急発掘調査報告書である。

2．調査は、飯田市教育委員会の直営事業として実施した。

3．平成15年度に現地調査、平成16年度に整理作業及び報告書刊行を行った。

4．現地での調査は羽生俊郎が、整理作業は坂井勇雄が担当した。

5．発掘調査及び整理作業にあたり、遺跡略号KHJ1728－1を用いた。また、遺構については以下の略号を使用している。
竪穴住居址－SB　建物址－ST　柵列－SA　土坑－SK　溝址－SD

6．北本城跡における発掘調査位置は国土基本図の区画LC75－03　26に位置し（社団法人日本測量協会1969「国土基本図図式　同適用規定」参照）、グリッド設定は飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図に基づいて株式会社ジャステックに委託した。

7．本書の記載は、住居址・建物址・柵列・土坑・溝址の順とし、住居址については時期の古い順に記載している。

8．土層の色調・土性については、小山正忠・竹原秀男　1996『新版標準土色帖』を用いている。

9．土器実測図に於ける土器断面の網掛けは灰釉陶器を表現し、石器実測中の網掛けは磨耗を示す。

10．本書に関わる図面の整理は、調査員・整理作業員の協力により、坂井勇雄が行った。

11．本書は坂井勇雄が執筆・編集し、吉川　豊・小林正春が校閲した。

12．遺構写真は調査担当者が撮影し、遺物写真は西大寺フォト　杉本和樹氏にそれぞれ委託した。

13．本書に関連した出土遺物及び図面写真類は飯田市教育委員会が管理し、飯田市川路1004－1飯田市考古資料館に保管している。

目　次

本文目次

序
例言
目次
第１章　経過
　第１節　調査に至る経過……1
　第２節　調査の経過……1
　第３節　調査組織……3
第２章　遺跡の環境
　第１節　自然環境……5
　第２節　歴史環境……5
第３章　調査結果
　第１節　基本層序……9
　第２節　遺構・遺物
　（１）住居址
　　①SB02……9
　　②SB01……9
　（２）建物址
　　①ST02……10
　　②ST03……10
　　③ST04……10
　　④ST05……10
　　⑤ST06……12
　　⑥ST07……12
　　⑦ST08……12
　　⑧ST09……12
　　⑨ST10……12
　　⑩ST11……14
　　⑪ST12……14
　　⑫ST13……14
　　⑬ST14……14
　　⑭ST15……14
　　⑮ST16……16
　　⑯ST17……16
　　⑰ST18……16
　　⑱ST19……16
　（３）柵列
　　①SA01……16
　（４）土坑
　　①SK18……19
　　②SK19……19
　　③SK20……19
　　④SK21……19
　　⑤SK23……20
　　⑥SK24……20
　　⑦SK25……20
　　⑧SK26……20
　（５）溝址
　　①SD15……20
　　②SD16……22
　　③SD17……22
　　④SD18……22
　　⑤SD19……22
　　⑥SD20……25
　（６）その他……25
　（７）柱穴群……25
第４章　まとめ
　第１節　これまでの調査の概要……39
　第２節　今次調査を終えて……40
報告書抄録……57

挿図目次

挿図１　調査遺跡位置図……2
挿図２　調査位置及び周辺遺跡地図……4
挿図３　遺構分布図……8
挿図４　基本層序……9
挿図５　SB02、01……9
挿図６　ST02、03、04……11
挿図７　ST05、06、07……13

挿図8　ST08、09、10、11、12……15
挿図9　ST13、14、15……17
挿図10　ST16、17、18、19……18
挿図11　SA01……19
挿図12　SK18～21、23～26……21
挿図13　SD15、16……23
挿図14　SD17、18、20……24
挿図15　北曲輪残存土塁及びSD19測量図……26
挿図16　周辺ピット①……28
挿図17　周辺ピット②……29
挿図18　周辺ピット③……30
挿図19　周辺ピット④……31
挿図20　周辺ピット⑤……32
挿図21　周辺ピット⑥……33
挿図22　周辺ピット⑦……34
挿図23　周辺ピット⑧……35
挿図24　周辺ピット⑨……36
挿図25　出土遺物……37
挿図26　出土遺物……38

写真図版目次

図版1　遺跡遠景、調査前風景……43
図版2　SB02、SB01、ST02……44
図版3　北曲輪柱穴群……45
図版4　西曲輪柱穴群……46
図版5　SK18、SK19、SK20……47
図版6　SK21、SK23、SK24……48
図版7　SK25、SK26、南側調査区……49
図版8　SD16全景、SD16内部……50
図版9　SD17、SD18、SD19……51
図版10　調査区全景（北、西曲輪）……52
図版11　北曲輪土塁、SD19（土塁北側）……53
図版12　重機作業風景、作業風景、
土塁調査風景……54
図版13　SD16出土遺物……55
図版14　北本城跡全景……56

第1章　経　　過

第1節　調査に至る経過

平成15年度に座光寺保育園建設の計画が飯田市保健福祉部児童課から教育委員会に提出された。当該地は埋蔵文化財包蔵地北本城跡内であるため、15年6月12日に開発側と教育委員会の二者による埋蔵文化財保護協議を行った。当遺跡は昭和56年度に座光寺小学校建設工事に先立つ発掘調査で飯田下伊那を代表する中世城郭の一つであることが確認されており、今回の建設予定地は西・北曲輪の一部に位置するため関連遺構の存在が予想された。こうした埋蔵文化財の状況であるため、工事に先立ち試掘調査を実施し、その結果に基づき改めて協議することとした。

平成15年12月19日試掘調査を行い、建物址の柱穴と思われる小ピット多数と曲輪を画する溝址等を検出した。この結果を受け、再度協議を行い、設計変更等は不可能との結論に達し、開発対象地の発掘調査を行い、記録保存することとなった。

第2節　調査経過

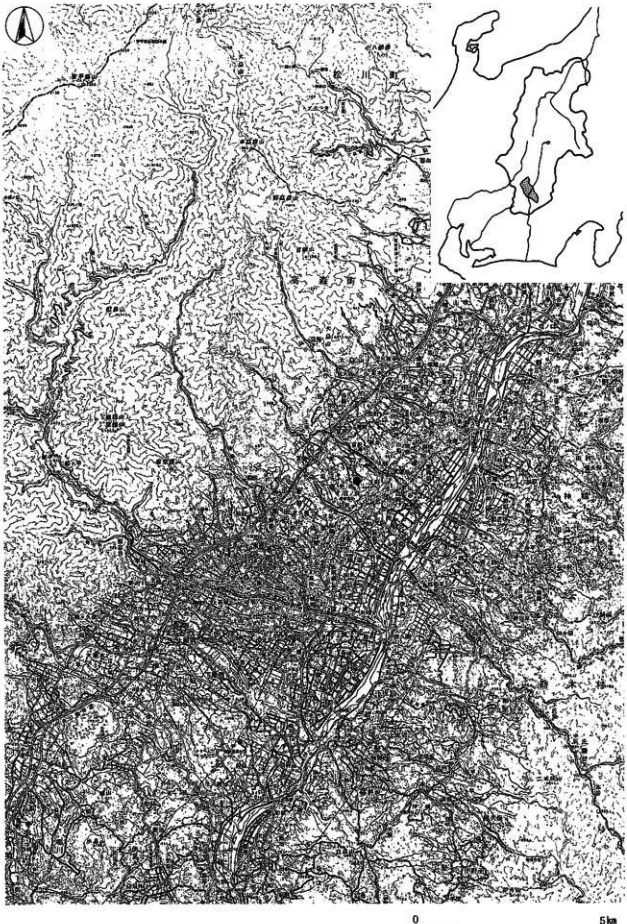
以上の経過を経て、平成16年2月5日より現地での発掘調査に着手した。まず、重機による表土剥ぎを6日まで行い、9日に委託による基準点設置、作業員による遺構検出作業を開始した。その後順次遺構を掘下げ、実測、写真撮影を行い現地での作業を3月10日に終了した。翌11日には地元座光寺史学会、12日には座光寺小学校6年生による現地での遺跡見学会が実施され、調査区の一部を埋め戻した。その後、飯田市考古資料館において現地で記録された図面・写真類の基礎的整理を年度末まで行った。

15年度の調査中、調査区北東側の隣接部で北曲輪の土塁と思われる遺構が確認されたが、深い竹林のため調査が不可能であり、翌年度工事実施前の竹林伐採時に測量調査を行うこととした。

平成16年度に入り、前年度の継続調査分として北曲輪内の土塁の測量調査および断面確認調査を7月16日に実施した。その他、出土遺物の水洗・注記・接合・復元作業・遺物実測・写真撮影・トレース・版組等を行い、発掘調査報告書を刊行した。

（1）作業日誌

平成16年2月5日（木）～6日（金）　重機による表土剥ぎ作業
2月9日（月）　基準点設置作業・テント設営・作業員による調査開始
2月10日（火）　検出作業
2月12日（木）　SB01掘下げ作業
2月13日（金）　SB01完掘・柱穴群掘下げ作業
2月16日（月）　SB02・SK19・20・21掘下げ作業
2月17日（火）　SB02完掘・SD16トレンチ掘り
2月18日（水）　SB02写真撮影・SD16掘下げ作業
2月19日（木）　SD16・18掘下げ作業
2月20日（金）　SD17掘下げ作業



挿図１　調査遺跡位置図

2月23日（月）　雨水排水作業・SD16・17掘下げ作業
2月24日（火）　SD16・17掘下げ作業
2月25日（水）　SD16・17・19セクション実測
2月26日（木）　柱穴群掘下げ作業
2月27日（金）　柱穴群掘下げ作業・SK22写真撮影
3月1日（月）　雨水排水作業・柱穴群掘下げ作業
3月2日（火）　SD19実測・SK25実測
3月3日（水）　南側調査区全景写真撮影
3月4日（木）　SD16掘下げ作業・SK23～26写真撮影・実測
3月5日（金）　SD16掘下げ作業
3月8日（月）　SD16掘下げ作業・北側調査区全景写真
3月9日（火）　SD16実測
3月10日（水）　SD16写真撮影・道具等搬出
3月11日（木）　座光寺史学会　現地見学会
3月12日（金）　座光寺小学校6年生　現地見学会・現場埋め戻し作業

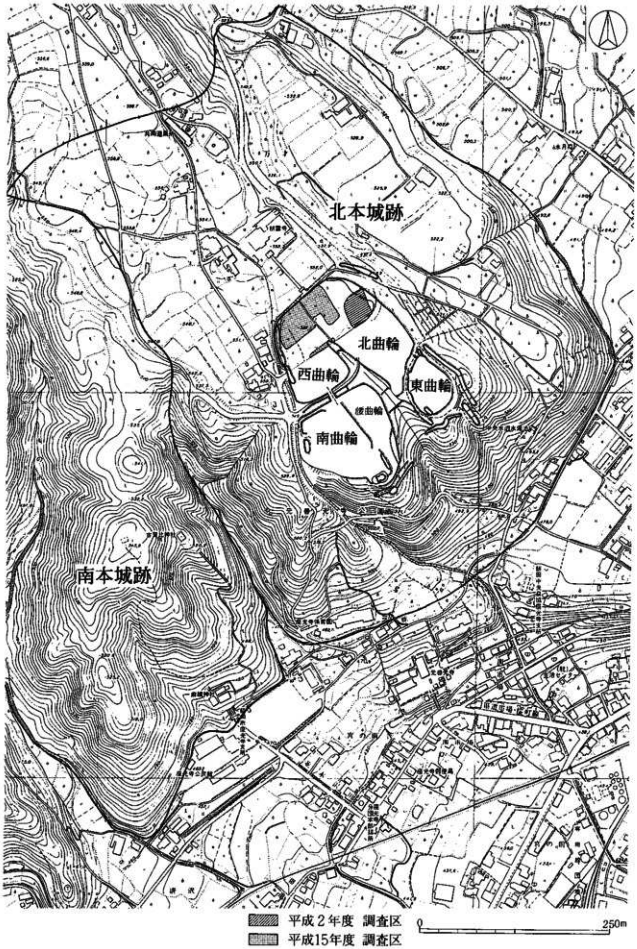
第3節　調査組織

（1）調査団

調査主体者	飯田市教育委員会　教育長　冨田拳啓					
調査担当者	羽生俊郎	佐々木嘉和	澁谷恵美子	坂井勇雄		
調査員	馬場保之	吉川金利	下平博行	伊藤尚志		
現場作業員	岡田直人	北原　裕	木下貞子	木下義男	小池千津子	小島康夫
	瀬古郁保	竹本常子	橋千賀子	仲村　信	中山敏子	樋本宣子
	福沢トシ子	松下省三	柳沢謙二			
整理作業員	金井照子	小平まなみ	松本恭子	宮内真理子	森藤美知子	吉川悦子

（2）事務局

飯田市教育委員会　教育長　冨田拳啓
教育次長　尾曽幹男
生涯学習課長　小林正春
文化財保護係長　吉川　豊
文化財保護係　馬場保之　澁谷恵美子　吉川金利（～平成15年度）
佐々木行博　下平博行（平成16年度～）伊藤尚志
（～平成15年9月）　坂井勇雄（平成16年度～）
羽生俊郎（～平成15年度）



挿図２　調査位置及び周辺遺跡地図

第2章　遺跡の環境

第1節　自然環境

長野県飯田市は、県南部を南北に並走する伊那山脈と木曽山脈とに挟まれた伊那谷の南端に位置し、天竜川はその中央部を南流する。北本城跡がある飯田市座光寺地区は、市街地の北東4km、飯田市の北端部に位置している。南は飯田市上郷地区となり、北は下伊那郡高森町、東は天竜川を挟んで同郡喬木村と境を接する。

伊那谷の地形は、山脈の形成に関わる断層地塊運動に伴う盆地と大小の段丘崖とによって構成され、さらに天竜川支流の浸食によって形成された断続的な段丘地形によって特徴づけられている。この段丘は、『下伊那の地質解説』によると火山灰土の堆積を基準として高位面・高位段丘・中位段丘・低位段丘Ⅰ・低位段丘Ⅱの5段階に編年されている。

北本城跡がある飯田市座光寺地区は天竜川右岸にあり、山間部を除いた地形は、南北にのびる断層によって形成される段丘崖を境として、俗に上段と呼ばれる洪積層の標高600m～470m前後の中位段丘及び低位段丘Ⅰと下段と呼ばれる沖積層の低位段丘Ⅱとに大別される。

上段は、木曽山脈の山裾部から大規模な扇状地が発達し、扇端から段丘縁辺にかけては小河川の開析・湧水等微地形の変化が著しい。特に地区を区画する北側の南大島川、南側の土曽川・栃ヶ洞川により扇状地が形成されるとともに、開析谷の浸食は著しい。この一帯は主要な果樹園地帯となっているが、中央自動車道・県道バイパスが南北に走り、宅地化も進んでいる。

下段は、数段の小段丘からなり、南側は比較的段丘面がよく残る。これに対して北側は、南大島川の押し出しにより段丘崖が不明瞭になっている。段丘崖直下に連続して存在する湧水が、湿地帯を形成しており、この一帯が恒川遺跡群で確認される集落の主たる生産域となっていたとみられる。また、低位段丘Ⅱの先端は、南大島川と土曽川の押出しによる台地であり、天竜川の氾濫原に面する自然堤防状になっており、古代においてはこの氾濫原を生産域とする集落が形成されたと推測できる。低位段丘Ⅱは、天竜川の氾濫原に面した南北に長い410m前後の南条面と、別府面、及びその上位にあたる430～440mの飯沼面とに分けられる。自然条件が良好なこの一帯は古くからこの地区の中心地として、人々の営みが連綿と続けられてきた。

北本城跡は、地形的には中位段丘八幡原面にあたり、土曽川と南大島川とに画され、天竜川に面した中位段丘単端部に位置する眺望の良い場所である。

第2節　歴史環境

座光寺地区は、埋蔵文化財包蔵地が濃密に分布している。前述の自然環境で概観した地形的特徴が当地区の遺跡立地に大きく関わっており、上段と下段で遺跡の分布や性格が異なる。また、発掘調査された遺跡が多く、全時代にわたって具体的な様相を描くことができる。上段には縄文時代から弥生時代にかけての遺跡が多く、特に山麓部には縄文時代の遺跡が集中し、鳥居龍蔵の調査で知られた大門原遺跡等、また、扇端から上段の段丘端部にかけては弥生時代後期の標式遺跡である座光寺原・中島遺跡がある。下段には縄文時代から近世にかけての遺跡が複合しており、時代ごとに立地が若干異なる。

旧石器時代の遺跡は上段においては確認されていないが、下段では終末から縄文時代草創期にかけての遺跡として、新井原・石行遺跡で有舌尖頭器が出土している。

縄文時代には、上段では早期の遺跡として、押型文土器が出土した宮崎A遺跡・米の原遺跡・大門原遺跡がある。中期になると多くの遺跡が知られているが、発掘調査例は多くはない。中期初頭の竪穴住居址と良好な土器群が出土した大久保遺跡や扇状地扇央部分に立地し、中期中葉から後葉の大集落とみられる大門原遺跡のほか、中期後葉では、宮崎B遺跡・座光寺原遺跡・宮崎南原遺跡がある。後・晩期は断片的な資料だが、後期前葉の注口土器等が出土した大笹遺跡がある。

また、南大島川沿いにある大井遺跡では詳細時期不明であるが3基の集石が調査されており、川に面した臨時的な調理場と考えられている。また、南大島川の浸食により形成された谷に面した段丘上にもいくつかの遺跡が存在する。中期以外は明確ではないが、美女遺跡では断片的ではあるが、草創期の遺構・遺物が確認されているほか、早期後葉から中期初頭まで断続的に集落が営まれており、早期後葉～前期初頭の良好な土器群が得られている。特に早期では立野式期の集落が調査されており、立野式土器の成立過程の解明と当地方における縄文社会確立期の姿を明らかにする上で重要な遺跡であるといえる。これ以外では、半の木遺跡で早期の断片的な資料が得られている。晩期終末には、美女遺跡では貯蔵穴群が、半の木遺跡では川に面した低地に水場遺構の存在が推定される。

下段では、恒川遺跡群で早期・前期の断片的な資料がある。中期では新井原・石行遺跡で中期後葉の大規模集落の一部が調査され、低位段丘における概期の大規模集落の存在が注目される。後期から晩期前半にかけての様相は明らかでない。晩期終末では、新井原・石行遺跡で竪穴住居址と土器群が確認されている。

弥生時代では、上段においてはこれまでに中期の遺跡はほとんど知られていないが、後期になると遺跡数が急増する。高燥な台地上へ集落展開する。人口増と生産手段の発達、畑作と稲作による複合農業を生産基盤としたことが背景として考えられる。後期前半では概期の標式遺跡である座光寺原遺跡や大門原B遺跡が、後半になると中島遺跡・宮崎A遺跡等の調査例がある。中島遺跡は近年の調査で大規模な集落であることが改めて確認された。

下段では、中期前半は断片的な資料があるものの、これまでに遺構は認められていない。後半では、恒川遺跡群で40軒以上の竪穴住居址が確認されている。後期前半は遺構の分布が稀薄であり、居住空間が限定されていた可能性が指摘されている。後半になると恒川遺跡群のほぼ中心部に位置する田中・倉垣外地籍で密な分布がみられる。

古墳時代では、上段においては断片的な資料が得られているのみであり、古墳の数も下段に比べると少ない。しかし、段丘端部には前方後円墳の北本城古墳や未調査ではあるが浅間塚古墳がある。前者は当地方における初期横穴式石室を有し、後者は時期的に古く遡る可能性がある。また、北本城古墳と同種の石室を有し、銀製垂飾付耳飾を出土した畦地1号古墳など円墳群が北側に集中する。

下段では、前期には恒川遺跡群において前時代から続く集落展開がみられる。また、半の木遺跡で前期の住居址が確認されている。恒川遺跡群では中・後期になると分布域も拡大するが、後期末には新屋敷・恒川B地籍など北側に分布が偏ることから、この時期の集落のあり方は必ずしも一様ではなく、終末期に至って何らかの政治的な規制が加わった可能性が指摘されている。古墳の数は、竜丘・松尾地区に次いで多い。下段においても北側に集中し、集落・生産域と隔絶された立地となる。前期古墳は未確認

であるが、中期になると新井原・高岡古墳群において調査例がある。帆立貝形古墳の新井原12号古墳に近接する４号土壙から馬具を装着した馬歯骨が出土し、また新井原２号古墳でも３基の馬の墓が確認されるなど、馬とのかかわりが強い集団の存在が明らかになってきている。後期になると当地方でも有数の前方後円墳である高岡１号古墳がある。北本城古墳や畦地１号古墳と同様の横穴式石室を有する。円墳では壱丈藪３号古墳・ナギジリ１号古墳等が調査されているほか、石塚１・２号古墳など、段丘崖下の傾斜地や土曽川・南大島川の支流の中流域、河川に面した傾斜地に小規模単位の円墳群がみられる。

奈良・平安時代は、上段では断片的な資料が得られているのみであり、現状では古墳時代以降は散在的に小規模な集落があったとみられる。

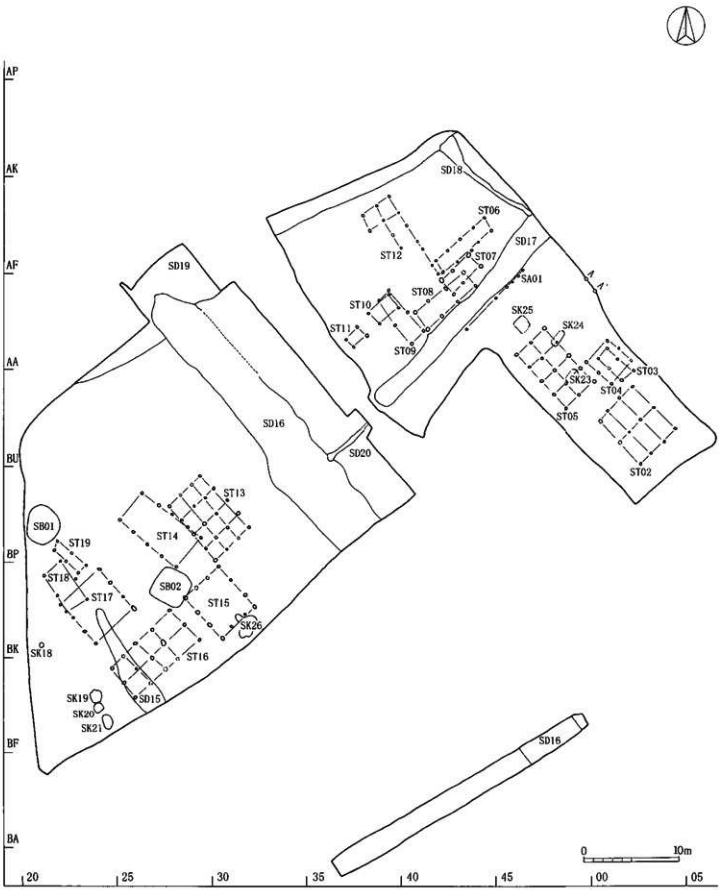
下段では、恒川遺跡群がかねてより、「伊那郡衙」ないし『三代実録』にみられる定額の寂光寺の有力な比定地とされてきた。昭和51年度から実施された座光寺バイパス建設に先立つ発掘調査で、「伊那郡衙」として認識された。政庁域等は特定できていないが、平成６年度には薬師垣外地籍で正倉群とみられる大型の掘立柱建物址が確認された。平成７・８年度には同地籍で区画溝から軒丸瓦を含む布目瓦が出土しているほか、周辺には古瓦の出土が確認されている。また、金井原瓦窯址では、半地下無段式窖窯１基と工房址２軒が調査され、西三河北野系とみられる瓦が出土している。近年、再確認された「富本銭」もこの下段北部からの出土とみられる。

さらに、恒川遺跡群では、平安時代前期には前時代の名残りとして官衙的な遺構・遺物があるが、中期以降一般集落に変貌していく。こうした中で小鍛冶遺構を伴う住居址が多いことから、前代の郡衙との関わりが指摘されている。新井原・石行遺跡では灰釉陶器蔵骨器を伴う火葬墓群が調査されており、官人層の墓所とも考えられている。この遺跡では、平安時代の遺構から押出仏が出土しており、高岡古墳群、古代伊那郡衙、寂光寺等との関連で注目されている。

中世になると上段では、段丘突端に北本城跡・南本城跡・浅間砦が築かれ、小河川に開析された複雑な地形を生かした立地となっている。北本城跡は調査により、４つの曲輪を主体とした居城的な城郭であることが確認された。16世紀中頃松岡氏の支城であったとの伝承がある以外は記録等が無く、その築城・廃城の時期や治めていた氏族等も不明である。現在のところ、座光寺の地名に共通する座光寺氏の居城であるという説が有力である。南本城跡は、現在でも良好に当時の姿をとどめている城跡であり、防御施設の整った防御専門の城郭で、その性格からも北本城跡との関連が考慮されている。
下段では新井原・石行遺跡で土葬墓・火葬墓が多くあり、古墳時代以降連続してこのあたりが墓域であった様子がうかがえると同時に、穴道思想定着以前の墓制として、経石を副葬する集石墓があったと考えられている。

近世では、大門原Ｄで火葬墓・土葬墓５基が調査されている。

以上のように北本城跡の所在する座光寺地区は、縄文時代以降連綿と人々の営みが続いてきた地区であり、今次調査の成果はまだ不明な部分が多い中世を検討するための貴重な資料となりえる。


AP
AK
AF
AA
BU
BP
BK
BF
BA
20
25
30
35
40
45
00
05
SD18
ST06
SD17
ST12
ST07
SA01
A
A'
ST08
ST10
SK25
SK24
ST11
ST09
ST03
SK23
ST04
ST05
ST02
SD19
SD16
SD20
ST13
SB01
ST14
ST19
ST18
SB02
ST17
ST15
SK26
SK18
ST16
SK19
SD15
SK20
SK21
SD16
0
10m

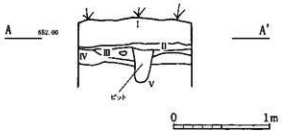
挿図３　遺構分布図

第3章　調査結果

第1節　基本層序（挿図4）

Ⅰ層　耕土
Ⅱ層　水田床土
Ⅲ層　10YR4/2　SiC　粘性強　しまり強（漸移層）
Ⅳ層　7.5YR7/3　SiL　粘性強　しまり強（ソフトローム）（遺構検出面）
Ⅴ層　2.5Y5/4　SiL　粘性極強　しまり極強（ハードローム）

遺構の確認は漸移層（Ⅲ層）上面で可能であったが、判断が困難なためローム層（Ⅳ層）上面を検出面とした。



挿図4　基本層序

第2節　遺構・遺物

（1）住居址

①2号住居址（SB02）（挿図5・25）

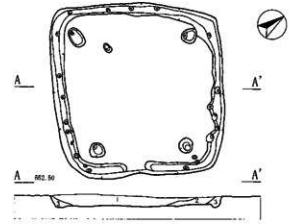
遺構　BM28グリットを中心に検出した。ST15に切られ、平面プランは3.7×3.6mの方形を呈する。検出面から床面までは35cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN－58°－Wを示す。住居内施設として4本の主柱穴と周溝、周溝内に側柱穴と思われる小ピットが確認された。

遺物　時期不明の土器片（底部）が出土している。

時期　遺構の形態から弥生時代と思われる。

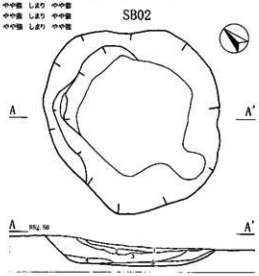
②1号住居址（SB01）（挿図5）

遺構　BR20グリットを中心に検出した。平面プ



(SB02)
1　7.5YR3/2　黒褐　SiC　粘性　やや強　しまり　やや強
2　7.5YR4/4　褐　SiC　粘性　やや強　しまり　やや強
3　7.5YR4/6　褐　SiCL　粘性　やや強　しまり　やや強

SB02



(SB01)
1　10YR4/1　褐灰　SiC　粘性　やや強　しまり　やや弱
2　10YR4/4　褐　SC　粘性　やや強　しまり　やや弱
3　10YR4/2　灰黄褐　SiC　粘性　やや強　しまり　やや弱
4　5YR5/6　明赤褐　SiC　粘性　やや強　しまり　やや弱
5　10YR4/4　褐　SiC　粘性　やや強　しまり　やや弱

SB01

0　2m

挿図5　SB02・01

ランは五角形状の不定形を呈する。検出面から床面までは52cmで、緩やかに立ち上がる。主軸方位はN－43°－Eを示す。住居内施設はない。

遺物　覆土中より楽焼丸碗片・鉄滓

時期　中世

（2）建物址

①2号建物址（ST02）（挿図6）

遺構　BW01グリットを中心に検出した。現地での調査中唯一確認できた建物址である。西側で一部削平を受けているため柱穴が1本確認できなかった。規模は桁行2間（約6.1m）×梁行3間（約5.2m）の長方形を呈する総柱建物址で、棟方向はN－55°－Wを示す。柱間寸法は桁行で3.0～3.1m、梁行が1.5～1.9mを測る。柱穴は径20～28cmの円形・方形を呈する。

遺物　なし

時期　中世

②3号建物址（ST03）（挿図6）

遺構　AA00グリットを中心に検出した。整理時に検討し建物址とした。ST04と重複関係にあるが前後関係は不明である。規模は桁行2間（約3.7m）×梁行1間（1.6m）の長方形を呈し、棟方向はN－40°－Wを示す。西側で柱穴が1本確認できなかった。北西側に複数の小ピットがあり、また北側が調査区外のため建物規模が拡大する可能性がある。柱間寸法は桁行で1.6～2.1mを測る。柱穴は径15～40cmの円形を呈する。

遺物　なし

時期　中世

③4号建物址（ST04）（挿図6）

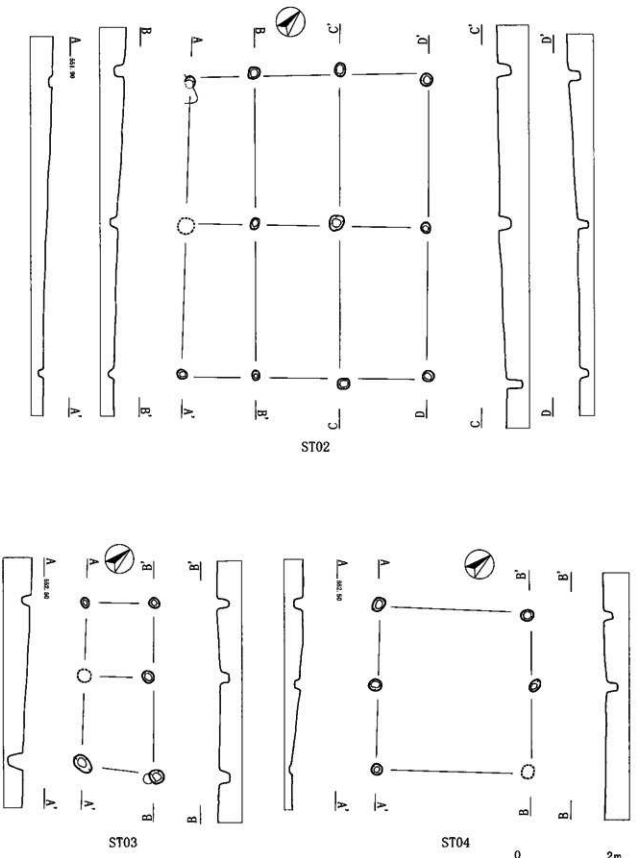
遺構　AA01グリットを中心に検出した。整理時に検討し建物址とした。ST03と重複関係にあるが前後関係は不明である。規模は桁行2間（約3.5m）×梁行1間（3.1m）の長方形を呈し、棟方向はN－50°－Wを示す。東側で柱穴が1本確認できなかった。ST03同様北側に建物規模が拡大する可能性がある。柱間寸法は桁行で1.7～1.8mを測る。柱穴は径20cmの円形を呈する。

遺物　なし

時期　中世

④5号建物址（ST05）（挿図7）

遺構　AA47グリットを中心に検出した。整理時に検討し建物址とした。SK23・SK24と重複関係にあるが前後関係は不明である。規模は桁行4間（約7.7m）×梁行2間（4.1m）の長方形を呈する総柱建物址で、棟方向はN－45°－Wを示す。南側が調査区外になるため不明であるが、建物規模が拡大する可能性がある。柱間寸法は桁行で1.8～1.9m、梁行が2.0～2.1mを測る。柱穴は径24～40cmの円形・方形を呈する。



挿図6　ST02・03・04

遺物　内耳土器片

時期　中世

⑤6号建物址（ST06）（挿図7）

遺構　AG43グリットを中心に検出した。整理時に検討し建物址とした。規模は桁行4間（約6.7m）×梁行1間（約1.5m）の長方形を呈する。棟方向はN－50°－Eである。遺構の南側部分が一部削平を受けていたため状況が不明であるが、建物規模は拡大する可能性がある。柱間寸法は桁行で1.6～1.8mを測る。柱穴は径約20cmの円形を呈する。

遺物　なし

時期　中世

⑥7号建物址（ST07）（挿図7）

遺構　AF43グリットを中心に検出した。ST08と重複関係にあるが前後関係は不明である。規模は桁行2間（約4.1m）×梁行1間（約1.9m）の長方形を呈する。棟方向はN－46°－Eである。柱間寸法は桁行で1.5～2.2mを測る。柱穴は径約20～40cmの円形を呈する。

遺物　なし

時期　中世

⑦8号建物址（ST08）（挿図8）

遺構　AD42グリットを中心に検出した。ST07、SD17と重複関係にあり、SD17より新しい。一部柱穴が確認できなかったが、規模は桁行3間（約6.8m）×梁行1間（約2.3m）の長方形を呈する。棟方向はN－46°－Eである。柱間寸法は桁行で2.5mを測る。柱穴は径30～52cmの円形を呈し、一部の柱穴内には礫が見られる。

遺物　南隅の柱穴内より「開元通宝」「洪武通宝」が出土

時期　中世

⑧9号建物址（ST09）（挿図8）

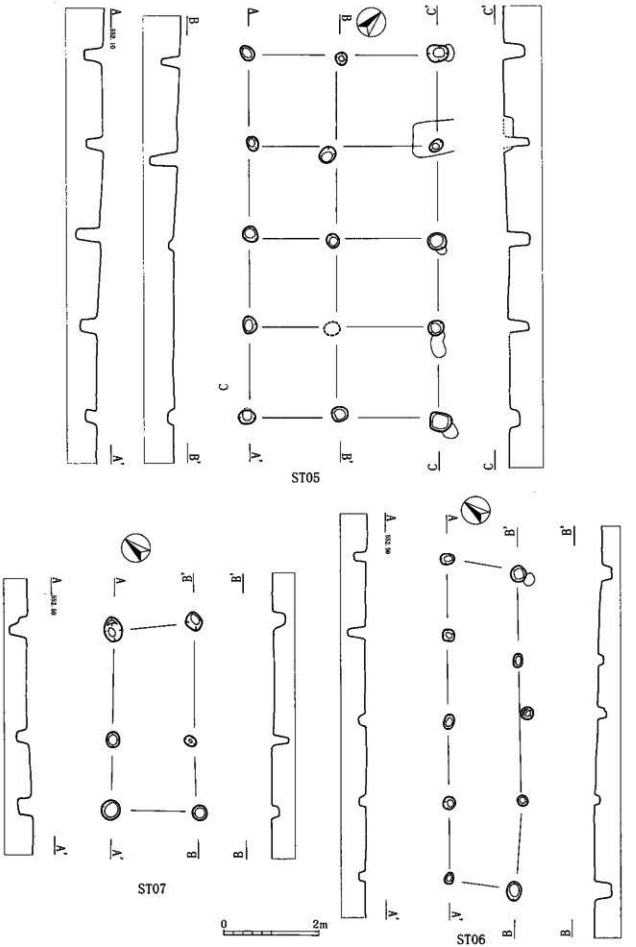
遺構　AC40グリットを中心に検出した。ST10と重複関係にあるが、前後関係は不明である。規模は桁行2間（約5.6m）×梁行1間（約1.9m）の長方形を呈する。棟方向はN－50°－Eを示す。柱間寸法は桁行で2.6～3.0mを測る。柱穴は径20～36cmの円形を呈し、一部の柱穴内には礫が見られる。

遺物　なし

時期　中世

⑨10号建物址（ST10）（挿図8）

遺構　AD38グリットを中心に検出した。ST09と重複関係にあるが、前後関係は不明である。規模は桁行1間（約2.7m）×梁行1間（約1.6m）の長方形を呈する。棟方向はN－50°－Eである。柱穴は径20～24cmの円形を呈する。



挿図7　ST05・06・07

遺物　なし

時期　中世

⑪11号建物址（ST11）（挿図８）

遺構　AB37グリットを中心に検出した。規模は桁行１間（約1.85m）×梁行１間（約1.4m）の長方形を呈する。棟方向はN－50°－Eである。柱穴は径約20cmの円形を呈する。

遺物　なし

時期　中世

⑫12号建物址（ST12）（挿図８）

遺構　AH38グリットを中心に検出した。遺構の南側が削平を受けているため柱穴の一部が確認できなかった。確認された規模は桁行７間（約9.4m）×梁行２間（約3.4m）の長方形を呈し、総柱建物址である。棟方向はN－30°－Wを示す。柱間寸法は桁行で1.0～1.9m、梁行が1.4～2.0mを測る。柱穴は径16～24cmの円形を呈する。

遺物　なし

時期　中世

⑬13号建物址（ST13）（挿図９）

遺構　BR29グリットを中心に検出した。ST14と重複関係にあるが前後関係は不明である。全ての柱穴を確認できなかったが、規模は桁行４間（約7.4m）×梁行３間（約4.9m）の長方形を呈する総柱建物址である。棟方向はN－40°－Wを示す。柱間寸法は桁行で1.7～1.9m、梁行で1.6～1.7mを測る。柱穴は径20～40cmの円形・方形を呈する。一部の柱穴内には礫が見られる。

遺物　なし

時期　中世

⑭14号建物址（ST14）（挿図９）

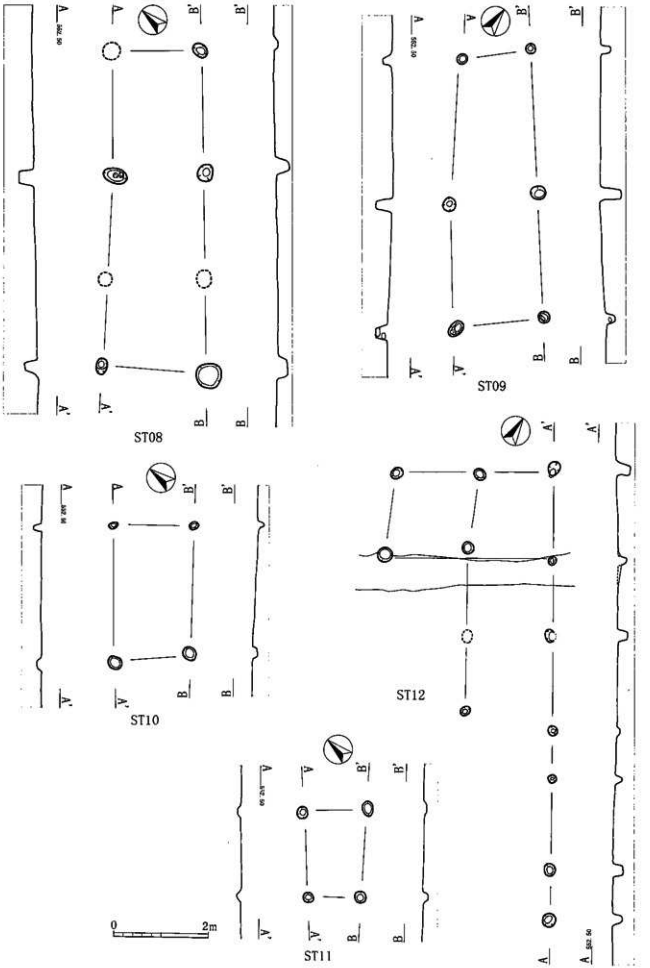
遺構　BR26グリットを中心に検出した。ST13と重複関係にあるが前後関係は不明である。規模は桁行４間（約7.7m）×梁行１間（約4.0m）の長方形を呈する。棟方向はN－53°－Wを示す。柱間寸法は桁行で1.7～2.2mを測る。柱穴は２０cmの方形を呈する。

遺物　なし

時期　中世

⑮15号建物址（ST15）（挿図９）

遺構　BM30グリットを中心に検出した。SB02・SK26と重複関係にあるが、ST15のほうが新しい。規模は桁行３間（約5.7m）×梁行３間（約4.9m）の長方形を呈する。棟方向はN－40°－Wを示す。柱間寸法は桁行で1.5～2.2m、梁行が1.4～1.9mを測る。柱穴は25～40cmの円形・方形を呈し、一部の柱穴内には礫が見られる。



挿図8　ST08・09・10・11・12

遺物　なし

時期　中世

⑮16号建物址（ST16）（挿図10）

遺構　BK27グリットを中心に検出した。SD15と重複関係にあるが、ST16のほうが古い。全ての柱穴を確認できなかったが、規模は桁行３間（約9.0m）×梁行２間（約4.4m）の長方形を呈する総柱建物址である。棟方向はN－46°－Eである。南側に柱穴と思われるピット群があり建物規模が拡大する可能性がある。柱間寸法は桁行で2.3～2.8m、梁行が2.1～2.2mを測る。柱穴は20～40cmの円形・方形を呈し、一部の柱穴内には礫が見られる。

遺物　なし

時期　中世

⑯17号建物址（ST17）（挿図10）

遺構　BM23グリットを中心に検出した。SD15・ST18と重複関係にあるが、SD15のほうが新しく、ST17との前後関係は不明である。規模は桁行３間（約5.5m）×梁行１間（約5.5m）の正方形を呈する。棟方向はN－42°－Wを示す。柱間寸法は桁行で1.6～1.9mを測る。柱穴は20～40cmの円形を呈し、一部の柱穴内には礫が見られる。

遺物　なし

時期　中世

⑰18号建物址（ST18）（挿図10）

遺構　BN21グリットを中心に検出した。ST17と重複関係にあるが、前後関係は不明である。規模は桁行２間（約4.9m）×梁行１間（約2.6m）の長方形を呈する。棟方向はN－35°－Wを示す。柱間寸法は桁行で1.9～2.5mを測る。柱穴は20cmの円形を呈す。

遺物　なし

時期　中世

⑱19号建物址（ST19）（挿図10）

遺構　BP22グリットを中心に検出した。東側の柱穴が一部未確認であるが、規模は桁行２間（約3.9m）×梁行１間（約1.2m）の長方形を呈する。棟方向はN－48°－Wを示す。柱間寸法は桁行で1.7mを測る。柱穴は15～20cmの円形・方形を呈す。

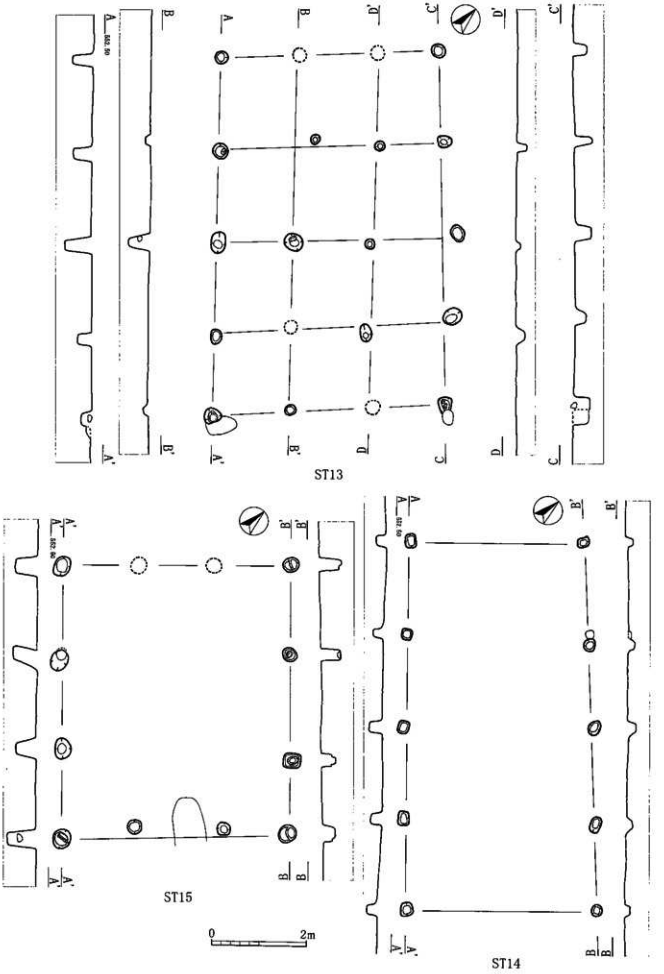
遺物　なし

時期　中世

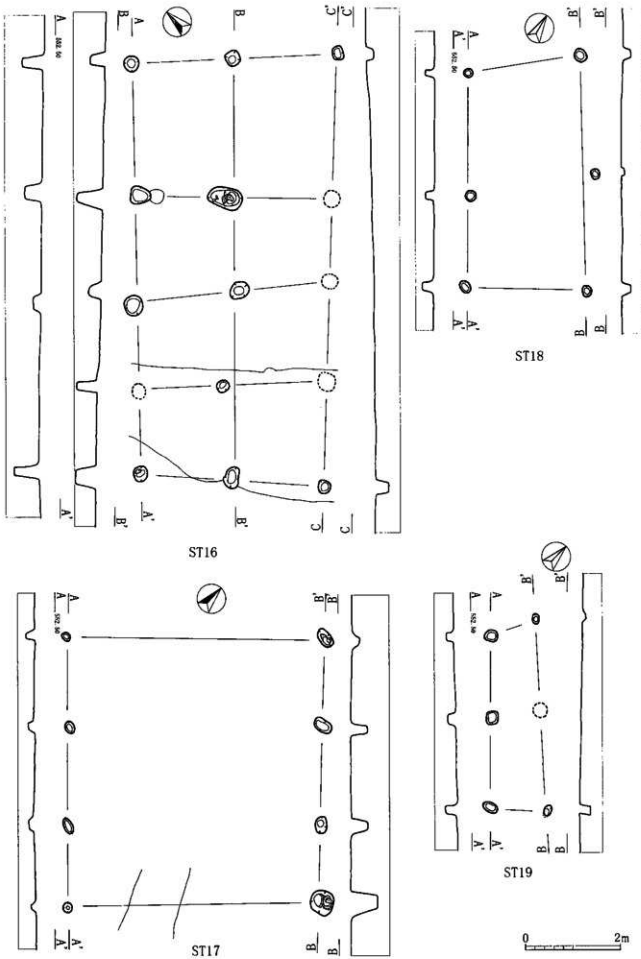
（３）柵列

①柵列１（SA01）（挿図11）

遺構　AE45グリッドを中心に検出した。SD17の東側肩部分で溝に平行して検出された。規模は全長



挿図9　ST13・14・15

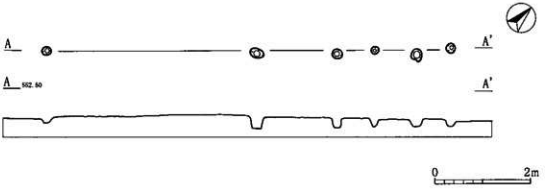


挿図10　ST16・17・18・19

9mで、杭間隔は1～4mを測る。

遺物　なし

時期　中世



挿図11　SA01

（4）土坑

①土坑18（SK18）（挿図12）

遺構　BK21グリットを中心に検出した。平面プランは円形で、長軸48cm、短軸46cm、検出面から底部までの深さ19cmを測る。

遺物　覆土中より銅銭3枚出土。粗悪品で遺存状態が悪い為原形を留めない。

時期　中世

②土坑19（SK19）（挿図12）

遺構　BH23グリットを中心に検出した。周辺の中世柱穴群より新しい。平面プランは不定形で、長軸134cm、短軸120cm、検出面から底部までの深さ25cmを測る。土坑内からは拳大～人頭大の礫が出土している。

遺物　なし

時期　中世

③土坑20（SK20）（挿図12）

遺構　BH23グリットを中心に検出した。周辺の中世柱穴群より新しい。平面プランは不定形で、長軸126cm、短軸125cm、検出面から底部までの深さ32cmを測る。土坑内からは拳大～人頭大の礫が出土している。

遺物　なし

時期　中世

④土坑21（SK21）（挿図12）

遺構　BG24グリットを中心に検出した。周辺の中世柱穴群より新しい。平面プランは楕円形で、長軸164cm、短軸114cm、検出面から底部までの深さ51cmを測る。土坑内からは拳大～人頭大の礫が出土して

いる。

遺物　内耳土器片・灰釉陶器片

時期　中世

⑤土坑23（SK23）（挿図12・25・26）

遺構　BY49グリットを中心に検出した。ST05と重複関係にあるが、前後関係は不明である。平面プランは方形で、一部攪乱で壊されていた。確認された規模は、長軸140cm、短軸113cm、検出面から底部までの深さ9cmを測る。土坑内からは拳大～人頭大の礫や、底部付近で炭化物が出土している。

遺物　鉄釉天目碗片・灰釉陶器片

時期　中世

⑥土坑24（SK24）（挿図12・25）

遺構　AB48グリットを中心に検出した。ST05と重複関係にあるが、前後関係は不明である。平面プランは長方形で、一部攪乱で壊されていた。確認された規模は、長軸168cm、短軸71cm、検出面から底部までの深さ8cmを測る。

遺物　青磁皿片

時期　中世

⑦土坑25（SK25）（挿図12）

遺構　AC46グリットを中心に検出した。周辺の中世柱穴群より新しい。平面プランは方形で、長軸152cm、短軸150cm、検出面から底部までの深さ54cmを測る。土坑内からは拳大～人頭大の礫や炭化物・焼土が出土している。

遺物　なし

時期　中世

⑧土坑26（SK26）（挿図12）

遺構　BL31グリットを中心に検出した。ST15と重複関係にあるが、前後関係は不明である。平面プランは柄鏡状で、長軸260cm、短軸251cm、検出面から底部までの深さ8cmを測る。

遺物　なし

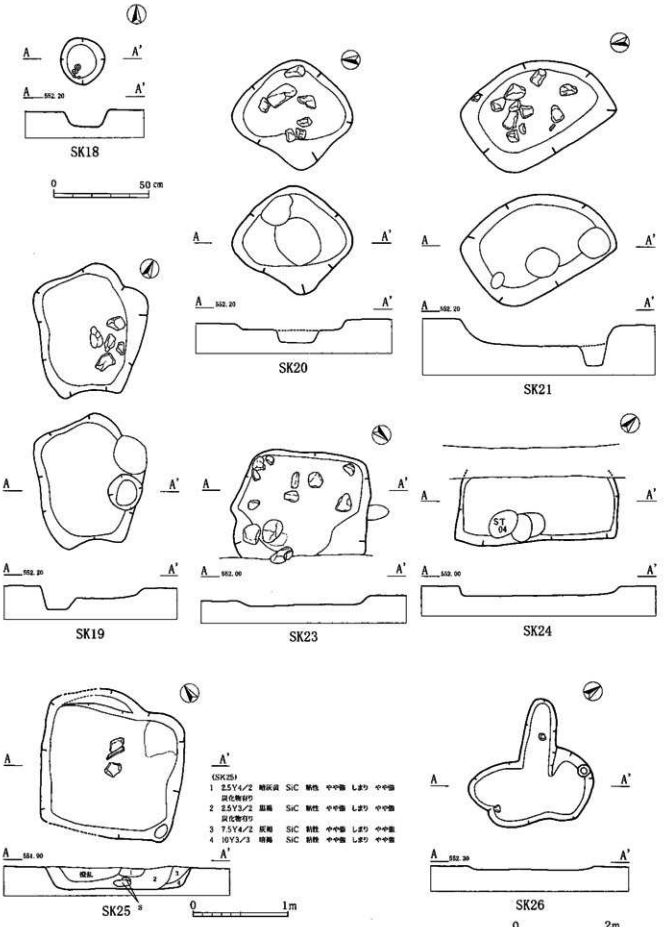
時期　中世

（5）溝址

①溝址15（SD15）（挿図13）

遺構　BM25グリットを中心に検出した。南東側用地外に連続する。溝状の攪乱の底部に暗褐色土が僅かに認められたため、溝址と判断した。ST16より新しい。調査区内での全長は12mで、幅0.9～2.8m、深さ4～37cmを測る。断面形は逆台形となる。

遺物　鉄釉天目碗片



挿図12　SK18～21・23～26

時期　不明

②溝址16（SD16）（挿図13・25・26）

遺構　BV31・BF48グリットを中心に検出した。これは昭和56年度の発掘調査時に確認された西曲輪と北曲輪を区切る堀の延長部分であり、耕雲寺前まで繋がる事が確認された。なお、南側の座光寺小学校体育館向かい側の調査区でも確認されたが、水道管が埋設されていたためその幅のみ確認した。SD19・20との前後関係は不明。調査区内での全長は32.8mで、幅4.3～6.3m、深さ1.0～1.8mを測る。断面形は北側が緩いU字形で、途中南側でV字状の薬研堀となる。北側の底部両端には柱間4.4mの柱穴が4基確認されており、西曲輪と北曲輪を繋ぐ橋状施設の一部と想定される。覆土の堆積状態からは下層で砂と粘土の互層が見られ、流水により比較的穏やかに堆積した様相が窺われ、廃城後の後世には一気に埋め戻され整地されている。

遺物　内耳土器片・灰釉陶器片・擂鉢片・鉄釉天目碗片・志野焼小皿片・砥石・縄文時代石器

時期　中世

③溝址17（SD17）（挿図14・25・26）

遺構　AB43グリットを中心に検出した。北側用地外に連続する。SD19と並行し、北曲輪内で区画を図った溝と考えられる。SD18と繋がるが前後関係は不明。ST08より古い。調査区内での全長は25.1mで、幅3.1～6m、深さ27～49cmを測る。断面形は逆台形となる。

遺物　鉄釉天目碗片・灰釉平碗片・擂鉢片・茶臼片・硯片

時期　中世

④溝址18（SD18）（挿図14・25）

遺構　AJ43グリットを中心に検出した。SD17・19と繋がるが前後関係は不明である。全長は12.5mで、幅0.15～2m、深さ15～37cmを測る。断面形は逆台形となる。

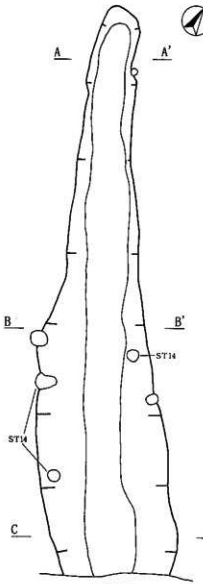
遺物　内耳土器片

時期　中世

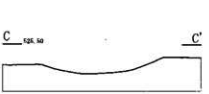
⑤溝址19（SD19）（挿図14・25）

遺構　調査区北側、現在の耕雲寺側の土地と西曲輪・北曲輪を区画する堀である。開発工事による削平が伴わないため、用地内をトレンチ調査した他は調査区内にある上場の把握、平成16年度に一部を測量調査した。堀は本沢川が流れる南曲輪・西曲輪の西側の堀と繋がり、北曲輪の北側を通り、東側に抜ける。現在耕雲寺山門前は埋め立てられ道として利用されているが、その北側には断面が逆台形の堀の痕跡が児童館下の道まで良好に残っている。トレンチ調査でも一部逆台形断面の痕跡が確認されており、埋め立てられている南側も同様な堀の形態であることが推測される。また、覆土内には投棄と考えられるローム層及びローム層下層に堆積すると見られるにぶい黄褐色砂がみとめられるが、付近にこれらの土で構成された盛土遺構が存在し、削平され、廃土が堆積した可能性も考えられる。

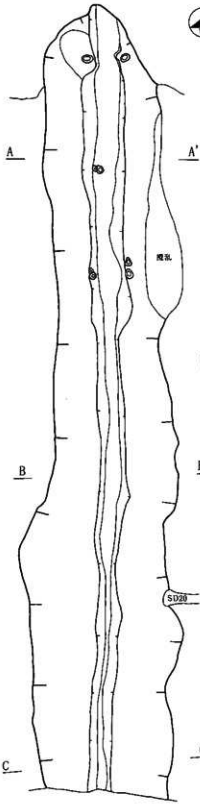
遺物　鉄釉花瓶片・縄文時代石器



SD15

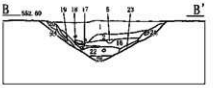


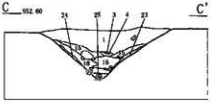
0 2m



0 4m

SD16

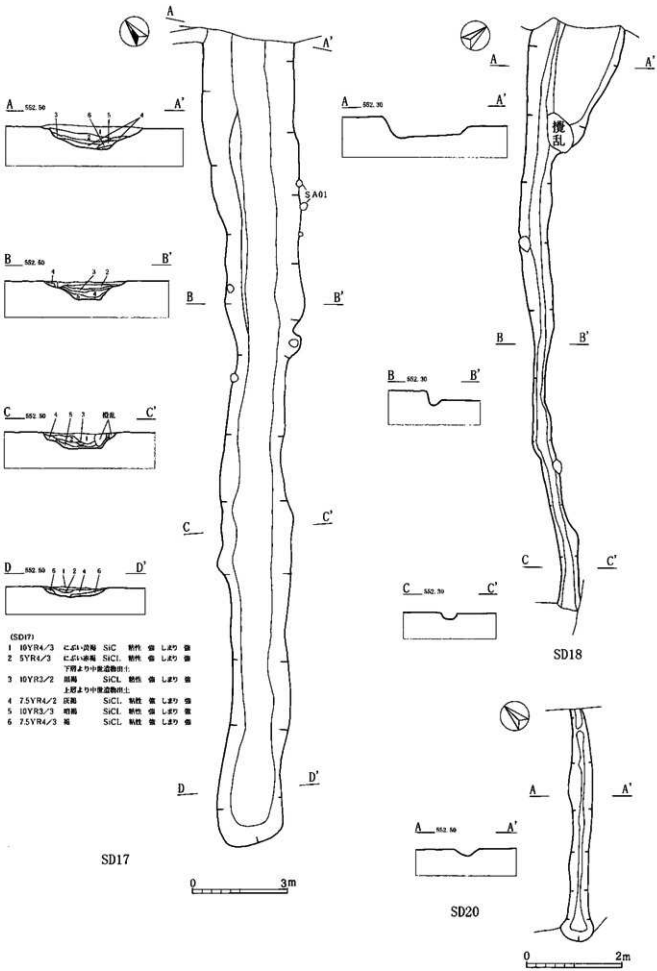




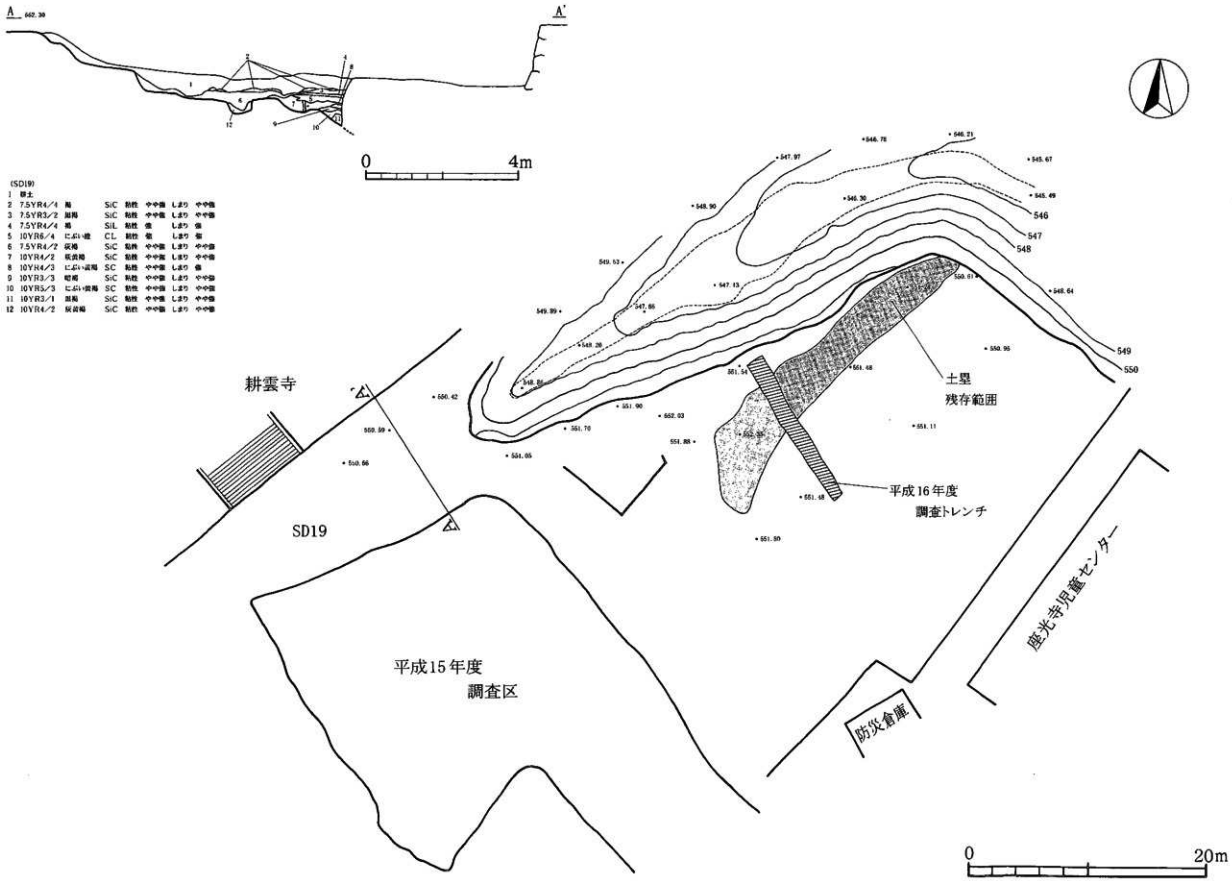
(SD16)

1	10YR3/3	暗褐	SL	粘性	やや強	しまり やや強
	南側に小礫大礫有り					
2	2.5Y15/4	黄褐	S	粘性	やや弱	しまり やや強
	遺物出土量多い					
3	10YR5/6	黄褐	SiCL	粘性	強	しまり やや強
4	10YR4/3	にぶい黄褐	SiC	粘性	やや強	しまり やや強
5	2.5Y4/2	暗灰黄	S	粘性	やや弱	しまり やや強
6	5YR4/3	にぶい赤褐	SiC	粘性	強	しまり 強
7	7.5YR5/2	灰褐	SiC	粘性	強	しまり やや強
8	10YR5/3	にぶい褐	SiC	粘性	やや強	しまり やや強
9	5YR4/4	にぶい赤褐	SiC	粘性	強	しまり 強
10	7.5YR4/2	灰褐	SC	粘性	やや強	しまり 強
11	10YR5/2	灰褐	SC	粘性	やや強	しまり やや強
12	7.5YR4/4	褐	SiC	粘性	やや強	しまり やや強
13	10YR5/2	灰褐	SiC	粘性	強	しまり やや強
	底部に撹乱跡付着					
14	10YR5/3	にぶい褐	SC	粘性	やや強	しまり やや強
15	7.5YR4/2	灰褐	SiC	粘性	やや強	しまり やや強
16	2.5Y5/3	黄褐	SiC	粘性	強	しまり やや強
	木根等混入					
17	7.5Y13/1	暗褐	SiCL	粘性	強	しまり やや強
18	2.5Y3/2	黒褐	CL	粘性	強	しまり やや強
19	7.5YR3/2	黒褐	SiC	粘性	やや強	しまり やや強
20	7.5YR4/3	褐	SiC	粘性	やや強	しまり やや強
21	7.5YR4/4	褐	SiC	粘性	やや強	しまり やや強
22	2.5Y5/2	暗灰黄	HC	粘性	やや強	しまり やや強
23	2.5Y5/2	暗灰黄	SL	粘性	やや強	しまり やや強
24	10YR5/6	黄褐	SiCL	粘性	やや強	しまり やや強
25	10YR5/1	褐灰	HC	粘性	強	しまり やや強
26	7.5YR4/6	褐	S	粘性	やや強	しまり やや強
	撹乱跡付着					

挿図13　SD15・16



挿図14 SD17・18・20



挿図15　北曲輪残存土塁 及びSD19測量図

時期　中世

⑥溝址20（SD20）（挿図14）

遺構　BV36グリットを中心に検出した。位置的にSD17の延長上にあるが、形状が異なるため別の遺構と判断した。また、SD16との前後関係は不明である。調査区内での全長は4.9mで、幅0.4～0.69m、深さ13～16cmを測る。断面形は逆三角形となる。覆土は単層で上層は水田造作時と見られる撹乱で不明である。

遺物　なし

時期　中世

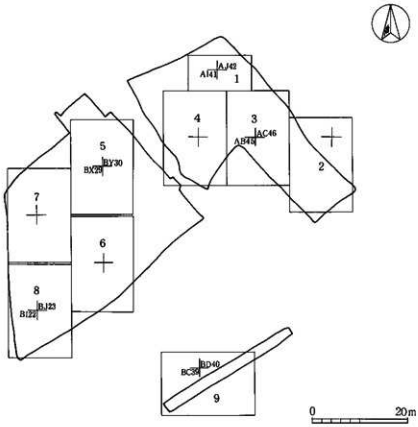
（6）その他（北曲輪土塁調査）（挿図15）

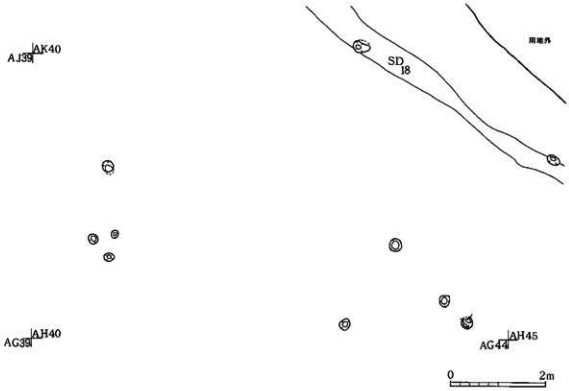
平成15年度の調査中、調査区北側の調査区外を踏査した結果、土塁と思われる人為的な地形を確認した。そこは北本城跡の北曲輪内に位置するが、当初竹が深く生い茂り地形を確認することは困難な場所であった。また、建設計画の中では駐車場予定地であり、盛土工事のため地下への影響は少ないと判断し本調査範囲外としていた地点であった。そのため再度開発側と協議を行い、土塁へ影響が及ばない工法の採用を要望するとともに、次年度、平成16年度において、工事実施前の竹林伐採終了後に再度土塁の測量調査及び断面確認調査を実施することとした。

翌平成16年７月16日に竹林伐採後の現地で土塁の確認調査を実施した。土塁は、北曲輪面からSD19に落ち込む際の部分で、ほぼSD19に並行する形で高さ約30～60cm、南北方向に約26m確認された。目視ではかろうじてその高まりを確認する程度の残存状態であった。土塁部分の測量調査を実施後、土塁の一部に直交する形で重機によるトレンチを設定した。結果、現表土から約70cm下で地山と思われるローム面を確認し、断面においてはローム面上層において約40cmの厚さで土塁造成時の盛土と思われる暗褐色土層を確認した。しかし、その上層は表土面になるため土塁の盛土の大部分は削平されているものと判断した。

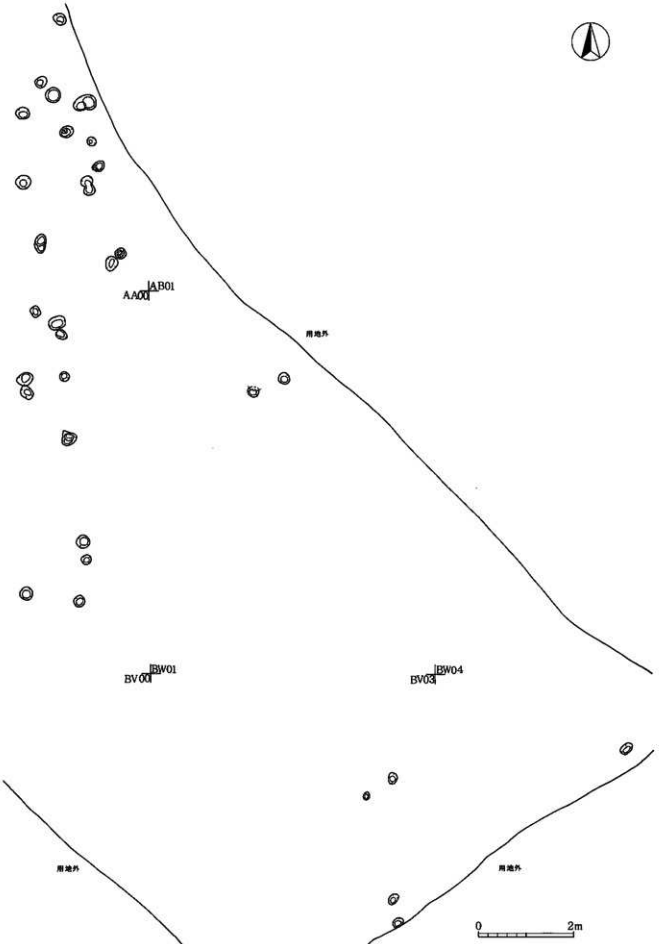
（7）その他柱穴群（挿図16～24）

調査区内では数百単位でピットを検出したが、その中には礫を含むものも少なくなく、これらのピット群は掘立柱建物址の柱穴と思われる。ピットは密集しており現地での復元は不可能であったため整理作業の段階で一部図上復元を行ったが、実際の建物址の数はさらに多いと思われる。これらの建物址は同時期に存在しているのではなく、簡素な構造物である故、建替えが何度も繰り返されていると考えられる。


AJ42
AI41
1
4
3
AC46
AH44
2
5
BY30
BX29
7
6
8
BJ23
BJ22
BD40
BC39
9
0
20m

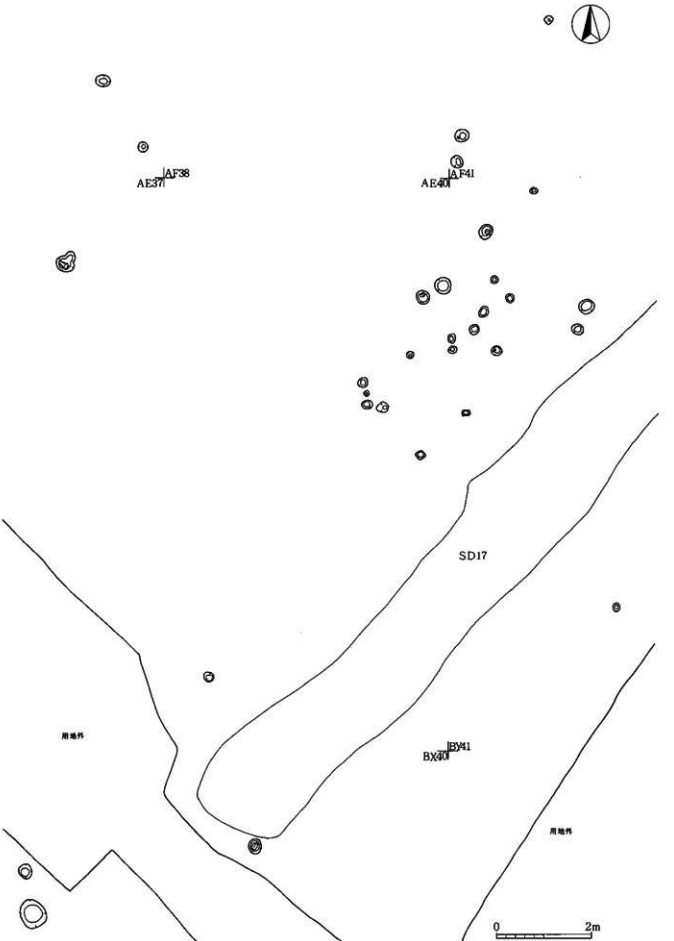

用地外
AK40
AJ39
SD
18
AH40
AG39
AH45
AG44
0
2m

挿図16　周辺ピット（1）

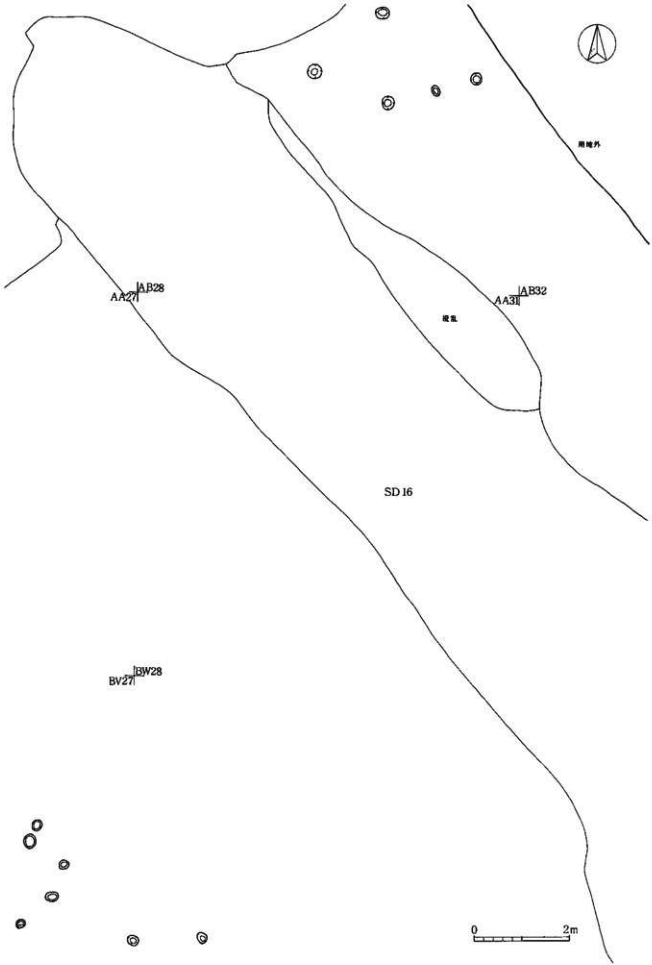


挿図17　周辺ピット（2）

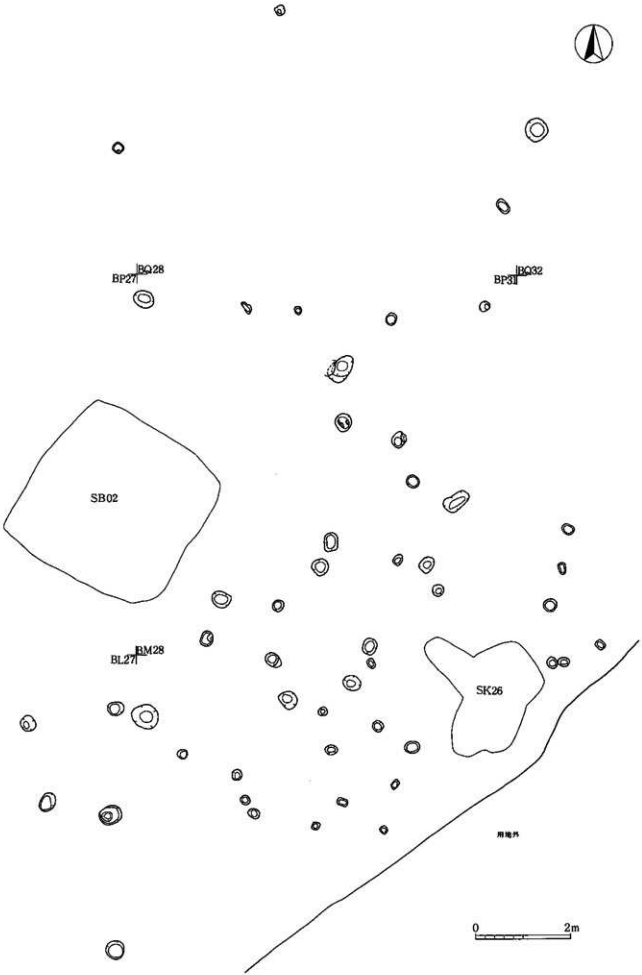
挿図18　周辺ピット（3）



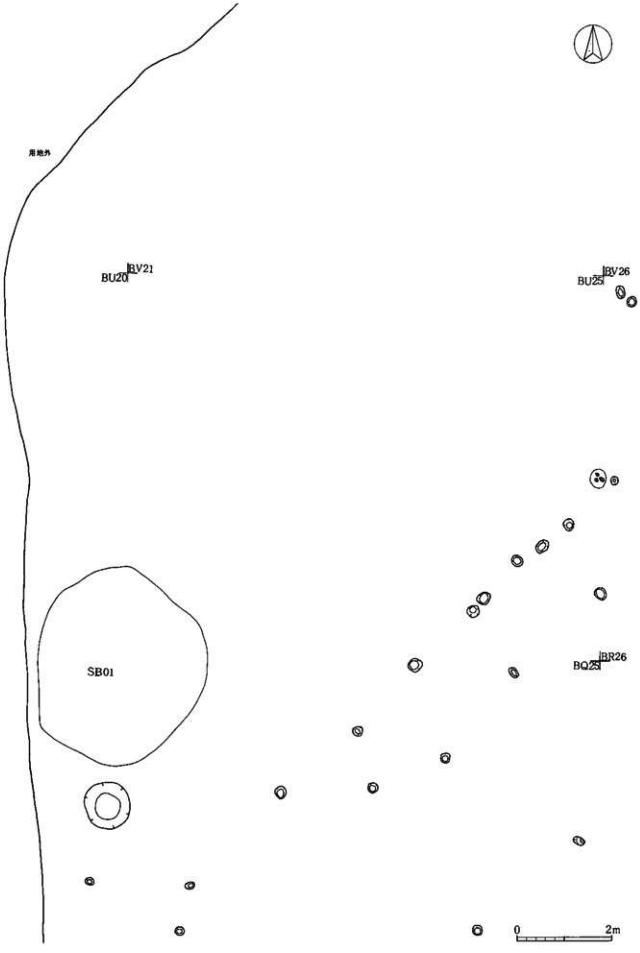
挿図19　周辺ピット（4）



挿図20　周辺ピット（5）



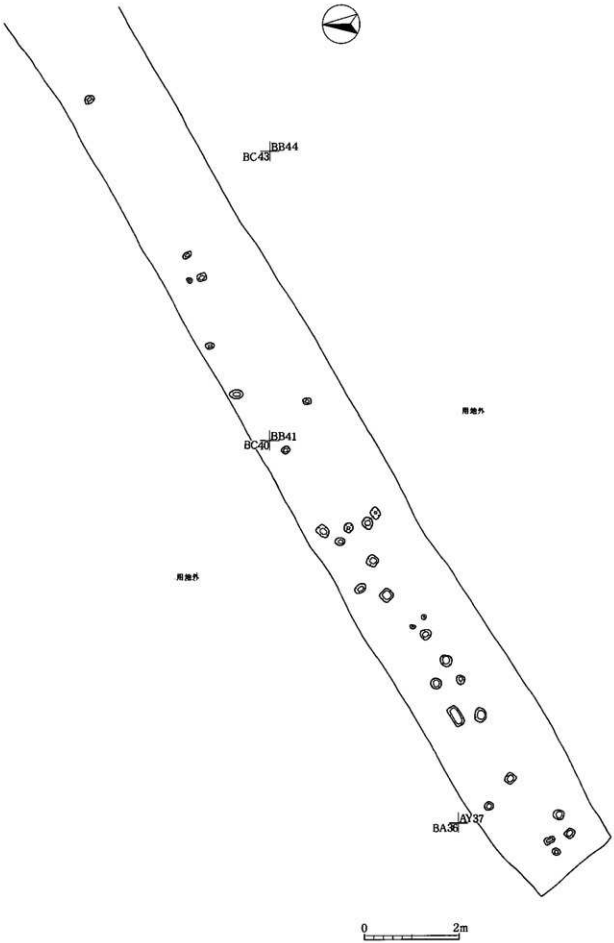
挿図21　周辺ピット（6）



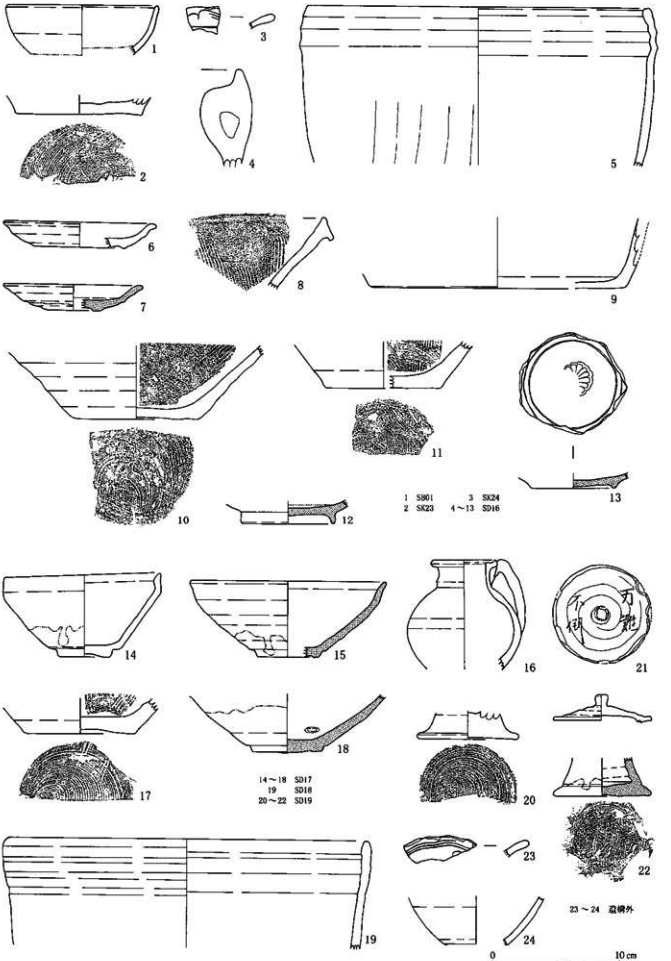
挿図22　周辺ピット（7）

BL21
BK20
SK18
BL26
BK25
SD15
SK19
SK
20
BH21
BG20
SK
21
調査外
調査外
0
2m

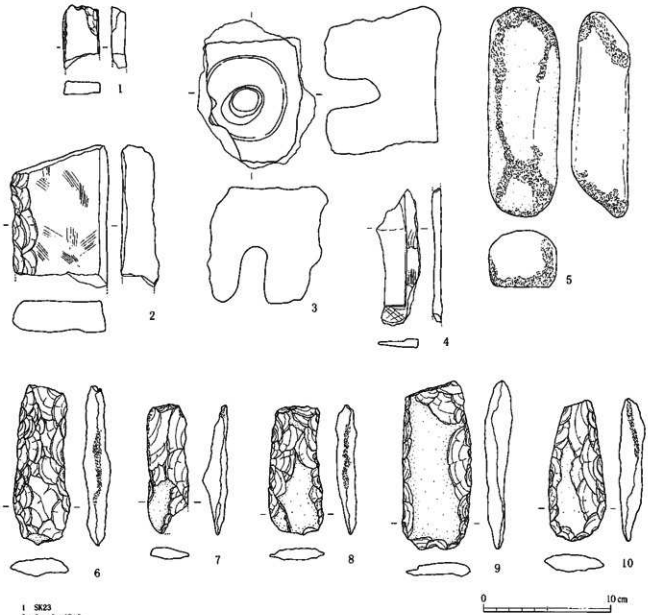
挿図23　周辺ピット（8）



挿図24　周辺ピット（9）


1 SB01 3 SK24
2 SK23 4～13 SD16
14～18 SD17
19 SD18
20～22 SD19
23～24 盗掘外
0 10cm

挿図25　出土遺物



1　SK23
2・6～8　SD16
3～5　SB17
9～10　遺構外

挿図26　出土遺物

第4章　まとめ

北本城跡はこれまで二度発掘調査が行われている。また、隣接遺跡内の調査においても城郭施設の一部が確認されており、城郭の様相が断片的ではあるが明らかになりつつある。ここではこれまでの調査の概要を整理するとともに今次調査の結果を含めて北本城跡について考察してみたい。なお、詳細な北本城の縄張図等については『北本城々跡　北本城古墳』(2003年３月　飯田市教育委員会) に掲載されているのでそちらを参照していただきたい。

第１節　これまでの調査の概要

（１）１次調査

昭和56年、座光寺小学校移転新築工事に先立つ発掘調査が実施された。建設予定地は城郭の南・東曲輪、西・北曲輪の一部に該当し、全面にトレンチを設定して６つの調査区を設定した。結果、南曲輪内の土塁、西曲輪と南曲輪を繋ぐ土橋、東曲輪と北曲輪の間にある虎口等の城郭施設を確認し、これまで不明な部分が多かった城郭の様相の一端を明らかにした。また、南曲輪の南側に位置する土塁より横穴式石室を確認し、これまでに未確認の前方後円墳の墳丘を土塁に利用している事が判明した。古墳は６世紀代の前方後円墳で、「北本城古墳」と名づけられ、確認された横穴式石室が現在座光寺小学校の敷地内に移築保存されている。

（２）２次調査

平成２年、座光寺地区児童館建設工事に先立つ発掘調査が実施された。建設予定地は城郭の北曲輪に該当し、調査の結果、城郭関連施設と思われる区画を意識して掘られた溝址・柱穴と思われる多数の穴等が検出された。その他の遺構からこの場所には恒久的な建物施設の他、簡易的な建物や柵が存在していたことがうかがわれ、北からの攻撃に備えると共に、居住空間としても利用されていたことを裏付けた。また、時期外の遺物として出土事例が少ない古墳時代の「子持勾玉」１点が出土している。

（３）その他

平成10年、農道施設工事に先立つ「稲荷坂遺跡」発掘調査が実施された。遺跡は北本城跡の西側に位置し、調査の結果、城郭の西端を画する溝址の一部を検出した。調査区内での全長は12.3mで、幅1.9～4.3m、深さ43～191cmを測る。断面形は逆台形を呈す。

平成13年、市道改良工事に先立つ「座光寺城遺跡」の試掘調査が実施された。遺跡は北本城跡の北側に位置し、調査の結果、座光寺1615番地付近で城郭の北側を画する溝址の一部を検出した。

これらの溝状遺構周辺の地形には堀の痕跡と思われる窪地が確認できることから、連続する堀であると考えられる。北端は平成13年度試掘地点よりさらに北側の段丘崖部であり、そこから南西方向に新座光寺大橋付近まで延びている。

第２節　今次調査を終えて

（１）中世以前

今次調査において、北本城が築城される以前の遺構として確認されたものは２号竪穴住居址である。遺構からは時期不明土器の底部と思われる土器片が出土しているが時期を決める根拠となり得ず、遺構の形状から弥生時代と判断した。その他、遺構外遺物として溝址の覆土等より縄文時代の打製石斧等が出土しており、周辺に該期の遺構が存在していたことが予想される。

（２）城郭について

○西曲輪

今次調査されたSD16の南西側が西曲輪にあたる。この曲輪については、昭和56年度調査で南曲輪との間を画する堀切や両曲輪を結ぶ土橋が確認されている。

今回の調査区は曲輪の北端部で、耕雲寺境内に面する場所に位置する。城郭施設としては西側にある堀切やその肩部に幅約５m高さ約２mの土塁が約90mの範囲で現在まで残存している。この土塁は北側のSD19に面する部分では確認されていないが、今次調査の検出状況を見ると、調査区北端部において遺構の空白地帯が認められる点から過去に土塁が構築されていた可能性も考えられる。

今次調査では竪穴住居址２軒（SB01・02　内SB02は弥生時代）土坑５基（SK18～21、26）、掘立柱建物址７棟（ST13～19）、溝址１条（SD15）が確認された。SB01及びSK21・26としたものについては、その形状に差異があるが曲輪内施設の竪穴状遺構である可能性も考えられる。その他の土坑については、その形状から土坑墓である可能性が考えられる。

掘立柱建物址としたST13～19については、一部重複する部分があることから数次の建替えが予想される。軸方向から（ST13・15・16・17）（ST14・19）（ST18）の３グループに分けられそうであるが、時期の変遷については不明である。尚、ST15・16については、構造上の違いがあるが位置関係から１棟になる可能性もある。この他にも図上復元が出来なかった柱穴群が調査区南隅を中心に多数存在しており、ある程度の期間建替えが繰り返されていると思われる。

○北曲輪

今次調査されたSD16の北側が北曲輪にあたる。この曲輪では昭和56年度調査で東曲輪との間を画する堀切、平成２年度調査で曲輪内を区画する溝址等が確認されている。本城跡内では最も広い曲輪である。

今回の調査区は平成２年度調査区の西側に位置し、北西側で耕雲寺境内に面する場所である。今次調査では土坑３基（SK23～25）、掘立柱建物址11棟（ST２～12）、溝址３条（SD17・18・20）、柵列１条（SA01）が確認された。土坑に関しては形状から西曲輪のものと同様、曲輪内施設の竪穴状遺構である可能性が考えられる。また、一部ST05と重なるものもあり、建物の内部施設の可能性も考えられる。溝址について、特にSD17はその形状から人為的な溝址であり、北曲輪内を北と南に区画している。北東側延長部分が調査区外のため全様は不明であるが、堀切部まで延長している可能性が高い。

掘立柱建物址はSD17を挟んで北側に７棟、南側に４棟確認されている。北側はその棟方向から（ST06・07・08・10・11）（ST09・12）に分けられるが、時期の変遷については不明である。ただST06～11については他のものと比べ簡素な長屋風の建物址であり、特徴的である。馬小屋等の存在も推測される。一方、南側については調査面積が小さいためさらに不明であるが、２時期ぐらいに分けられる。棟方向から北側の（ST09・12）グループと同時期と思われる。西曲輪同様、この他にも建物址と確認出来なかった柱穴群が多数存在しており、この曲輪内においてもある程度の期間建替えが繰り返されていると思われる。

発掘調査中に調査区北東側の調査区外地で土塁の一部が確認されたが、この部分が曲輪北端部に位置する。周囲には堀（SD19）が巡らされており、一部ではあるが良好な形で現在まで残存している。曲輪面から堀底まで３～５ｍを測る。確認された土塁はほぼ堀（SD19）の肩部に位置しており、さらにSD17の予想延長部分と並行する。ただ土塁の東側が残存していないためその正確な配置は不明であるが、城郭北側の防御を意図した曲輪といえる。

北曲輪は西曲輪同様建物施設が存在していたと思われるが、曲輪面を区画する溝址が多い点が特徴的である。

今次調査では曲輪内を面的に広く調査し、多くの建物址、柱穴群を確認した。この数は非日常的な使用を否定するものであり、なおかつこれらの建物址の中には総柱のしっかりとした建物址も幾つか見られる事から、ある期間居住空間として利用されていた可能性を示した。その時期については、出土した遺物がわずかであるため決めてに欠けるが、１次調査同様15～16世紀の様相を示す。この遺物量の少なさについては、１次調査で主郭と位置づけられる南曲輪をトレンチ調査した際に多くの陶磁器・天目茶碗が出土したのとは対照的な結果であるが、今次調査した西・北曲輪の居住者が城主に従う家臣団であることを示しているのかもしれない。これらの曲輪は有事の際には主郭を守る防御拠点でもあり、検出された溝址や土塁がそれを物語っている。

（３）SD16について

昭和56年度の調査で南曲輪と東曲輪、西曲輪と北曲輪を画する堀を確認しているが、今次調査でもその延長部分を確認したことは大きな成果であった。当初西曲輪と北曲輪の北側は連続する曲輪面である可能性も推測されていたが、SD16の検出により西曲輪と北曲輪は明確に区画されていた事が確認された。この堀は南側の南曲輪、東曲輪間において、断面Ｖ字型で、幅が端部で約45ｍ、曲輪中心部で約13ｍと城郭中心部に向かってその幅を狭めている。西曲輪、北曲輪間の南端部もトレンチ調査でＶ字形の薬研堀の様相が確認されている。

今調査で確認されたSD16は、幅4.3～6.3ｍとその幅をさらに狭めているが、断面形は南東部分と同様なＶ字形の薬研堀で構築されていた。しかし、西・北曲輪北端のSD19と接する部分では断面形が逆Ｕ字型で構築されていた。この部分には西曲輪と北曲輪を結ぶ橋状施設に関係する遺構と思われるピットが２基ずつ掘られており、この施設に規制されているのかもしれない。

北本城は飯田下伊那でも有数の中世城郭である。今次調査を含めて３回調査が行われ、その城郭施設

が少しずつ明らかになりつつあるが、全容の解明にはさらなる調査が必要である。その一つが現在でも残る周辺地形の観察である。城跡の中を歩いてみると城郭施設の痕跡と思われる地形が意外と多く観察できる。今次調査区の北西側に位置する耕雲寺の北側にある堀切の一部と思われる痕跡がそうであり、その北側にある座光寺大橋付近から北に延びる堀跡は良好にその痕跡を留めている。その他、周辺には腰曲輪と思われる平坦地形が見られる。これらの観察から北本城は主郭を取り囲むように幾つもの曲輪で構成された規模の大きな城郭であったことが推測される。今後は、このような地形の観察や周辺に残る小字等の調査を含めた総合的な検討を進めていく必要性があると思われる。

その他、南西側の別の丘陵地に位置する「南本城」の存在も重要である。南本城はこれまで本格的な調査が行われていないが、有事の際の山城としての姿を良く残している貴重な城跡である。この南本城と北本城との関係を検討していくことも今後の重要な課題である。

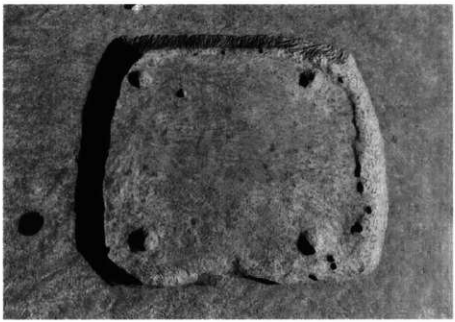
引用・参考文献

下伊那教育会	１９６１	『下伊那史』第４巻
飯田市教育委員会	１９９２	『北本城々跡』
高森町教育委員会	１９９５	『松岡城跡』
郷土出版社	１９９６	『定本　伊那谷の城』
飯田市教育委員会	１９９９	『稲荷坂遺跡』
飯田市教育委員会	２００３	『北本城々跡・北本城古墳』

遺跡遠景

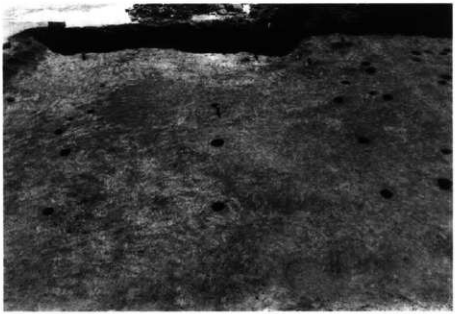
調査前風景

図版 2

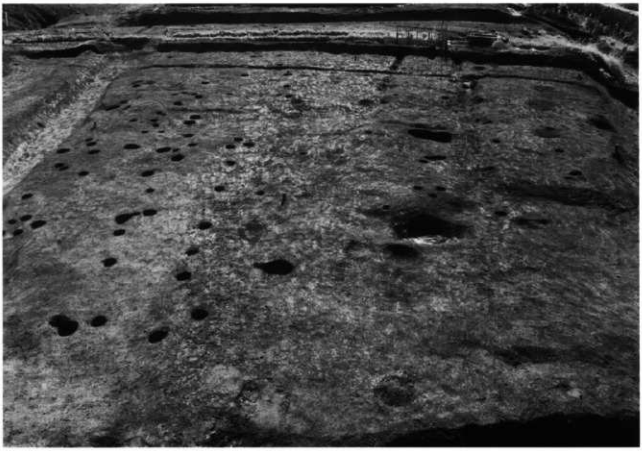


SB02

SB01



ST02



北曲輪柱穴群

北曲輪柱穴群

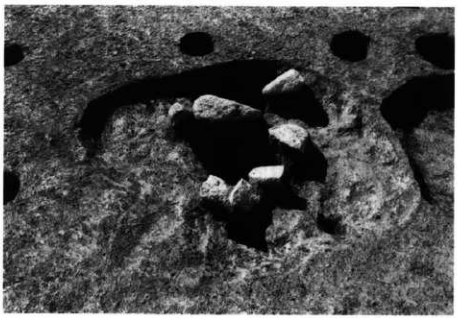
図版 4

西曲輪柱穴群

西曲輪柱穴群

SK18

SK19



SK20

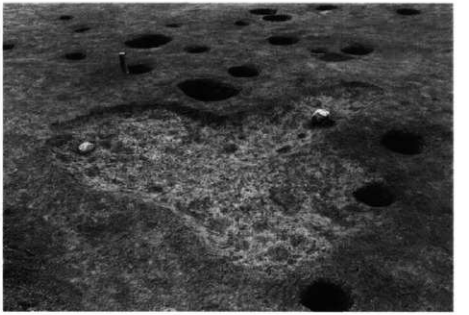
図版 6

SK21

SK23

SK24

SK25



SK26

南側調査区

SD16全景

SD16内部

SD17

SD18

SD19

図版10

調査区全景（北曲輪）

調査区全景（西曲輪）

北曲輪土塁

北曲輪土塁

SD19（土塁北側）

重機作業風景

作業風景

土塁調査風景

SD16出土遺物

図版14

北本城跡全景（昭和56年撮影）

報告書抄録

ふりがな	きたほんじょうせき
書名	北本城跡Ⅲ
副書名	
巻次	
シリーズ名	
編著者名	坂井勇雄
編集機関	長野県飯田市教育委員会
所在地	〒395−0002　長野県飯田市大久保町2534番地　TEL 0265−22−4511
発行年月日	西暦2005年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
きたほんじょうせき 北本城跡	いいだしざこうじ 飯田市座光寺	20205	35度 32分 05秒	137度 51分 29秒	平成16年 2月8日 から 平成16年 3月11日	2117㎡	保育園建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北本城跡	城址	弥生時代 中世	住居址　1軒 掘立柱建物址　18棟 溝址（堀）　6条 竪穴状遺構　9基 柵列　1条	縄文時代石器 鉄釉天目碗 灰釉陶器 茶臼 擂鉢 内耳土器	飯田下伊那で 調査例が少ない 中世城郭の発掘調査

北 本 城 跡 Ⅲ

2005年3月28日 発行
編集・発行 長野県飯田市大久保2534
飯田市教育委員会
印 刷 杉本印刷株式会社